
幻想物語 双剣士の少女

神無瀬羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想物語 双剣士の少女

【Nコード】

N6921L

【作者名】

神無瀬羅

【あらすじ】

普通の少女だった私が目覚めた先は……樹海の中？ と言うかここどこなの？ いきなり狼に襲われて戦うはめになるしも足噛まれるし本当に最悪。

幻想物語シリーズ 第一ストーリー 双剣士の少女をよろしく願います。

目覚めれば樹海の中（前書き）

えーと、これでは初投稿ですが、よろしくお願いします。

「こんにちわ、この作品の主人公をやらしていただいてる者です、普通の少女だった私はなぜか、こんな樹海に飛ばされたけど、本当にどこよここ？　ともかく、これからよろしくお願いします」

目覚めれば樹海の中

「昔から面倒な事は大ッ嫌いなのに……いつもいつもどうして巻き込まれるんだか……」

今、私は森の中で大きく愚痴っていた。森の中と言っても日本にある様な小さな森では無くて、正に樹海とも言える大きな森の中である。

なんで、私はこんな場所にいるんだろ、記憶の最後には確かに家の中でグッスリと寝た覚えがあるのだけど、起きて見れば訳も分からない樹海……。

「一番最初に思いつくのは私の見ている夢なんだけど……」

手の感覚はある……、意識もはっきりとしているし、何よりも私は今、言葉を話せている。

夢の中って話したり考えたりがほとんど出来ないし、この状況下でここまで考えられるんだから、夢って事はまずありえない。

「私……なんでこんなに冷静になっけいられるんだろ」

いや、昔らそうだったけ、車に轢かれた時も道路に倒れながら、道路冷たいなあとか考えてたし、周りから悪口とか陰口言われても、感情的になった事も無い。

「はあっ……、けど、流石に慌てようよ私」

樹海と言う場所は確実に危険がある。夜に成れば迷う事になるだろうし、毒を持つ生物も多数存在する。そんな中、私がどうして、自分に対して慌てようと言ったのかは簡単だ。

どうしよう、この狼っぽい奴等の群れ……。

ガルルルッ！！

「ほら、私は美味しくないわ、見て分かるでしょ？ 皮と骨と水分ぐらいしかないから」

言葉が通じるはずも無いのだけど、なんとなく言ってみた。無論通じるはずも無く、狼達は私を少しずつ囲もうとして来ていた。

数は三匹で、全員、犬と同じぐらいの大きさ、火があれば追っ払えるんだけど、そんないいものは私はもって無い、これが熊だったら、眼を合わせながら後ろに下がっていけばいいけど、狼相手にそれは無意味だと思う、だって明らかに私を食べようとしてるし……。

「流石に拙いかも……夢かどうかは分かんないけど、喰われるのは勘弁してほしいな！」

もう考えてる暇は無い、狼達はすぐにでも跳び付いて来そうだ、覚悟を決めて遣るしかない。

近くにある武器は少し長い木の枝、これを使ってどうにかするしかないよねっ！ 私は木の枝を掴み取り、一気に樹海の中を駆ける！

ガァァァァッ！！

狼達が後を追う様に樹海の中を駆けて来る。やっぱ逃がしてくれないか、それに走りづらくて仕方ないし、狼の方は逆に慣れてるみたいでかなり近寄って来るのが早い！ 私はすぐに逃げる事を明らめ、跳び付いて来た狼の一匹の頭に木の枝を叩き付けた。

「まず一匹」

バキと言う音と共にキヤインと言う狼の小さな叫びが響き、残った二匹の間に倒れ動かなくなった。気絶してくれたのかな？ けど、まだピンチな事に変わりはない、唯一の武器であった木の枝は折れた。

こんな短い枝じゃ役にたたないよね　あ、そうだ！

「二刀流なんてね」

折れた枝を拾い上げて、私は両手に木の枝を持った。無駄に格好つけて見たけど、まあ、ないよりはマシだね。

ガルアアアア！

残った二匹の狼は怒りの雄叫びをあげながら私に向かって飛び掛る。私は反射的に左手の木の棒で手前の狼の爪を弾き、右手の木の棒でもう一匹の狼に向かって突きを放つ。

「え？　あれ？　どうして？」

今の私の動きは可笑しい、まるで流れる動きで片方の狼を押さえ、もう片方の狼を突きで気絶させた。

けど、こんな事を考えている間に左手の木の棒で弾いた狼が真下に入り込み、私の足に噛み付く。

「っあ！ 痛いっ！」

これでこれが夢でない事が証明された　っ！　なんて暢気な事言ってる場合じゃないっ！　い、痛いやめてよね、私は別に痛いのが好きな変体でもなんでも無いの！

「あ、ち、力が入んない」

……なぜか体に力が入らない、これってもしかして毒？　そんなこんな意味の無い所に連れて来られて、狼に襲われて、それで狼の餌になるの？　やだ、そんなの絶対やだっ！　けど、力が入んな……い。

「だ、誰か助けて」

私が必死に小さな言葉をあげたその瞬間、シュツと言う音と共に狼の頭に何かが突き刺さった、そして、誰かが狼の体を蹴り飛ばし、私の体を持ち上げると駆け出し始めたのだった。

私は意識を保とうとは思わなかった。それは体が人と言う温もりを感じていたからだった。

よかった、助かったみたいで……。

目覚めれば樹海の中（後書き）

「まだ、私の名前が出てこないからここに出せないじゃない、さっさと出してくれない？」

次の時に出すから、許して？　ね？

「仕方ないなあー……、それじゃ、またね」

兄と私

「お兄ちゃんはどうしていつも家の中にいるの？」

それは小さい頃、私が毎日感じていた疑問だった、私の兄は外に出る事は無くいつも家の中に居て外に出る事は滅多に無かった。

「ふむ、その言われ方だとまるで僕の仕事が自宅警備員だと思われそうだな」

兄は本がとても好きで部屋はまるで書庫の様になっている。そんな兄は既に十八歳で大学には行かず高卒だった。

「そうだな……僕は待っているんだ、友人が来るのを」

「毎日？」

「ああ、毎日だ」

兄はその友人と約束でも交わしたのだろうか？ だけど、兄の雰囲気を見るとそうとは思えない、けど、嘘を言っている様にも見えなかった。

「お兄ちゃん是不思議だね、いつも変な事ばかり言ってる」

「そうか？ まあ、そうかも知れないな」

そう言いながら首を傾げながら兄は小さく笑い、私の頭を優しく

撫ぜるとそのまま二階に行ってしまった。

「私はもう子供じゃないのに……」

まあ、悪い気分では無かったから、頭を撫ぜられるのも……。

けど、翌日、兄……神月羅瀬は唐突に行方不明になる。私……神月瀬羅は必死に兄を探したが結局は見つからず、そして。

「ん……あ？」

「目覚めたか？」

さっきのは夢？ ああ、お兄ちゃんが居なくなった日の事ね……。

「貴方、さっき私を助けてくれた人？」

「ああ、ウルフの群れに襲われてる所を眺めてたんだがな、危なそうだから助けた」

つまり、貴方……いや、アンタは人が襲われてるのを高みの見物していたと？

「一度、殴つていい？ ねえ？ いいよね？ 人が必死に逃げたのに眺めてたんでしょ？ あの狼、もといウルフだっけ？ 簡単に倒したんだからいつでも助けられたはずだしっ！」

八つ当たりだと言う事は理解していた、あの時、助けて貰わなければ私は今頃ここには居ないし、きっとウルフの餌になっていただろう。

「それだけ元気なら大丈夫だな、殴りたいなら殴ればいいだろう、それに一言言わせて貰うが、準備も無しに魔物が住む森に入る奴に言われたくは無い」

うつ、と私は言葉に詰まる。私はここに連れてこられたとしても、自分の意思で来なかったとしてもコイツの言ってる事はここでは普通の事なのだろうと思う。

「はいはい、ありがとうございます、それでここはどこ？　ちなみにアンタの名前は？」

「ここは町外れにある森で、ここは俺の家だ、名前はガルム」ステッドだ」

「私はセラ」カンヅキ、此处から町って歩いてどのくらいかかる？」

名前が外国風なのに、言葉は日本語、コイツが私に合わせてる可能性はまず無い、とすれば、在り得るのは異世界よね……本好きの兄に影響されて私も本は沢山読んだからなんとなく理解できた。

「歩いて三日だな、ちなみに休まず歩いてだ」

「は？　はあああああ？！」

私の目的、まずは町に行く……だったけど、これは色々大変そ

う
だ
っ
た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6921/>

幻想物語 双剣士の少女

2010年10月28日08時49分発行